

令和8年4月23日（木）

本日ここに、宇美町戦没者の御霊をお迎えして、ご遺族ならびに来賓各位のご列席を賜り、令和8年度合同慰霊祭を執り行うにあたり、謹んで慰霊の言葉を捧げます。

去る3月17日には、先の大戦から80年の節目に、宇美公園の忠霊塔を整備し、恒久平和への願いを込めた芳名碑の除幕式を執り行いました。

本来ならば真新しい芳名碑の前で、本日の慰霊祭を執り行うはずでしたが、あいにくの雨により室内での開催となっております。

芳名碑には、祖国の安寧と家族の無事を願いつつ、命をかけて散華された451名のお名前が刻まれています。一つ一つのお名前の背後には、かけがえのない人生と祖国や家族への深い思いがあったことと拝察いたしております。

その芳名の中に、「西依作雄（にしより さくお）」さんというお名前があります。

実は、本日ご参加されています宇美町遺族会の西依綾子（にしより あやこ）様のお父様で、戦時中にインドネシアの西ニューギニアでお亡くなりになられております。

作雄さんが軍隊に召集された当時、西依さんは生まれたばかりでしたが、4歳の時、母親がお父さんに会いに行くよと言って、大喜びで駐屯先の広島県呉市へ電車で行ったことを覚えているそうです。

戦局が次第に悪化する中、ついに作雄さんにも激戦地であるニューギニアへの出兵命令が下りました。西依さんは毎日、父の無事を祈りながら、ご自身も空襲のたびに防空壕へ逃げて、必死に生きておられました。

終戦後、他の家に次々と兵隊さんが帰ってくる光景を見て、うちにもお父さんが帰ってくると心待ちにしていたのですが、軍隊で一緒だった人から、「作雄さんはマラリアにかかり、医者も薬もないジャングルの中で、一人病気で苦しみ亡くなった」という話を聞かされたそうです。

母親は、目に涙を浮かべて、「もうお父さんは戻ってこないんだよ。」とつぶやくように言い、お父さんはもうこの世にいないんだと、西依さんは頭の中で繰り返し言い聞かせましたが、まだ子どもだったため現実を受け止めることができませんでした。

最愛の父、作雄さんは、遠く離れた地で日本の勝利を願い、病と不安で心が押しつぶされそうになりながらも、ひたすらに家族の無事を祈っていたのではないのでしょうか。生きて帰りたい、娘に会いたい、家族と普通に暮らしたい、そん

な作雄さんの気持ちを量り知ることはできません。

現在、西依さんは、小学校の授業で、「語りべ」として戦争中の体験や出来事を子どもたちに伝えられています。その中でこう話をされています。

「戦争は勝っても負けても、たくさんの人たちが亡くなり、その家族や友人が辛い思いをし、深い悲しみを背負って生きていかなければならない。だから戦争は二度としてはいけない。」と。

世界に目を向ければ、アメリカとイスラエルがイランを攻撃し、これまでに3,500人あまりのイラン人が亡くなりました。その中には、過って学校が爆撃されて亡くなった、何の罪もない未来ある子どもたちも含まれています。

ロシアによるウクライナへの侵攻も4年以上が経過しましたが、いまだ解決の糸口が見えません。なぜ人間は、このような過ちを繰り返すのでしょうか。

平和で豊かな今日の繁栄も、そこには尊い犠牲があったことを次の世代に語り継ぐ、そのためにも、この碑文に刻まれている戦争の悲惨さと命の尊さを後世に伝えていくことが、私達に課せられた使命であると改めて感じております。

結びになりますが、戦没者の方々の御霊（みたま）がとこしえに安らかならんことをお祈りし、ご遺族の皆様のご多幸を心より祈念申し上げ、慰霊の言葉といたします。

令和8年4月23日 宇美町長 安川 茂伸